

9月23日(土・祝)・24日(日)



香川県発祥の「養殖ハマチ」県花・県木の「オリーブ」
2007年、このふたつが出合い「オリーブハマチ」は誕生

刺身盛り

※仕入の状況によりネタが異なる場合がございます。

1パック

1,000円 (税込)

西田鮮魚店

72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

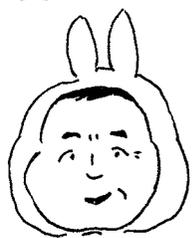
御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

オリーブハマチと旬の魚。オリーブシリーズもすっかり定番になりました。その中でもこのオリーブハマチは、丁度良い！何が丁度良いかというと、脂のノリ、甘味、さっぱり感と良いと取りなんです。オリーブの葉を餌に混ぜ育てた事により、脂に臭みがなく仕上がっております。
今回オリーブハマチだけではなく盛り合わせにしたのは、今が旬で大人気のニシンも良い、少し早めの秋鯖の酢シメも良い、と秋口は美味しい魚が沢山あります。なら、オリーブハマチ主役、「お刺身の秋の旬の大運動会」やっちゃいます。
店長には、申し訳ないですが、運動会らしく、市場で右に左に走り回って探してもらいましょう(笑)。庄原も運動会シーズンで、多くの皆様にお寿司お刺身のご予約を頂き、誠に有り難うございます。予約を頂く度に、私も小学生の時運動会が終わって家に帰ると、結果がどうであれ、毎回おぼあちゃんがお寿司を頼んでくれた事を思い出します。私はそれが楽しみで、運動会が終わったら疲れているのも忘れ、家まで走って帰っていました。あの頃を思い出しながら、今日は皆さんにお刺身を切らせてもらおうと思います。

西田鮮魚店 主任 奥原 歩久斗

『知ってる？上野池に立つ銅像のこと』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



「知らなかった。」

そう言う人がけっこういた。長い年月の中で、周りの木が生い茂り隠されていたから、仕方ない。

上野池の瓢山の入り口の三叉路のそばに建っていた二つの銅像。上半身の胸像だ。

永山忠則代議士。西田修一県議会議長。戦後の庄原を牽引した2人の政治家の像。

その銅像が建つ場所にブルドーザーが入り、工事が始まった。「なにが始まったんだらう」と思いながら朝晩、前を通った。

何日かして亀井静香代議士と木山徳郎県議会議長の銅像が建つと聞いた。なるほど、そういうことか。そのために、敷地を広げているらしい。

私にとって西田修一という名前には特別な響きがある。

庄原がまだ『町』であったころの昭和24年、町長に当選。

その後、広島県議會議員になり、広島県議會議長、全国都道府県議會議長を務めた西田修一。

彼は私の祖父・西田兼松のすぐ下の弟で、私の父の叔父、私の大叔父ということになる。兼松は34才で亡くなっているが…。

『西田の魚屋』の息子が西田修一という名前を意識するようになったのはいつごろからだろうか。

中学生になったころには、そうだったような気がする。大人の人から、「あんたあ、修一さんの親類か？」と問われて「はい」と胸を張って答えていた覚えがある。

しかし、実は、言葉を交わしたことはない。一度、なにかの会合で「まあちゃんの息子さんです」と紹介されて頭を下げたことがあるくらい。まあちゃんは私の父・西田昌男。

子供ごころに、偉い人なのだとすることはわかっていて、なんなんだろう。しがない魚屋の息子だけど、自分だって、身内にこんな偉い人がいるんだ。という、まあ自分のプライドなんだろうが、そんなものを満たしてくれた存在だった。

大人になっても、それはあった。広島で、名刺を出す時「庄原の西田？西田先生の？」と問われることが多かった。

「そうです」と答えると、なんとなく相手の対応が丁寧になったような気がした。だれも、話したことがないことなんて知らないから…。まあ、そんな気がしただけかもしれないが。

余談だが、西田修一が亡くなったのは昭和53年、77才のとき。私は26才。亡くなってしばらくは「西田先生の？」と聞かれていたが、10年くらいたつと変わった。

広島で酒を飲み、店の女の子と話すうち、「庄原の西田さん？」「そう」「篤っちゃんのこと？」「そう、篤史の…」。誰も修一という名前を出さなくなった。そして私も、篤っちゃんとは、法事で会って挨拶するくらいが関の山だったのに、

『篤史』と、さも親しい仲であるかのように返事をしたものだ。

さらに余談だが、私の弟の篤生は篤っちゃんと同級生。私よりは親しいらしい。それはいいのだが、私は『昌史』、弟は『篤生』。篤っちゃんは『篤史』。私たち兄弟5人の名

付け親は、西浦時代の隣の家の岩瀬のおじさん。どうやら、篤っちゃんの名前をつけたのも岩瀬のおじさんらしい。わからないが。

今日23日はお彼岸。西田一族の墓は宝蔵寺にある。父と墓参りに行った記憶はない。連れて行ってくれていたのはいつも母だ。

あのころ、我が家の墓に入っていたのは生後一週間で亡くなった私の1才上の兄、晴俊。墓石というほどのものもなく、大きめの石を積み重ねたようなものだった。粗末といえば粗末だが、戦後の貧しい時代、26才でしかなかった父母にとって、一週間でこの世を去った我が子の墓としてはこれくらいの墓を作るのが精一杯だったのだから。

お盆や彼岸に晴俊の墓に線香をあげたあと、母は必ず、宝蔵寺の入り口にあるひと際広い墓所に私たちを連れて行った。塀で区画されたそこには、西田修一に連なる先祖が眠っていた。私たちはわからぬまま、母のあとに続き、いくつもある墓石に線香を供えた。

西田修一が亡くなり、それまで以上に立派な墓石が建ち、傍らに石碑が建てられてからも、その都度、私は西田修一という大きな存在を意識し、誇りに思い、力を与えられた。自分も何かができそうな気がして…。

私にとっての墓参りは、そんな時間でもあった。

昭和54年、亀井先生が永山先生の後継として衆議院議員に当選。この前年、西田修一は世を去っているが、亀井静香という型破りの政治家が庄原から出たということに後々勇気づけられることになる。

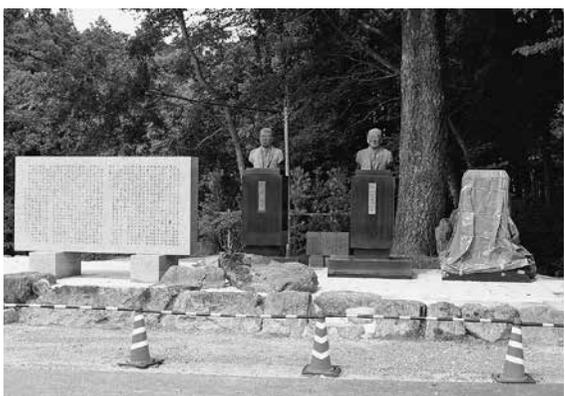
自民党の総裁選挙に出馬したり、国民新党を興し党首として活躍するなど、中央政界で縦横無尽に暴れる姿を見るにつけ、庄原という片田舎に生れた自分でも、何者かになれるのではないかと思うことができた。

残念ながら、亀井先生ともお話ししたことはないのだが、大きな力をいただいた。

永山忠則、西田修一、亀井静香、木山徳郎。

庄原にとって上野池に立つ4つの銅像は、庄原に生れ、庄原に住む私たちに、自分の可能性を信じる力、前を向く力を与えてくれる、今風にいうなら強力なパワースポットそのものなのかもしれない。

先達に続け！



上野池の4つの銅像

向かって右端、今は台座だけがあるところに亀井先生、左端、西田先生の隣に木山先生の銅像が座る予定